

音声の振動を電気信号に変えて脳に伝えるのは私達の内耳の仕事であるが、内耳に音の振動が伝わる経路は、二つある。私達が自分自身の声を直接聞くときは、自分の声が空気中を伝わり自分の鼓膜を震わせ中耳を介して内耳に至る経路（＝**空気伝導**）と、声帯や喉頭の振動が自分の骨を伝って直接内耳に到達する経路（＝**骨伝導**）、という二つの経路を通して音が内耳に至る。自分の声をテープレコーダーに録音して聞くと、自分の声ではないように聞こえるが、これは録音機の性能が悪いからではない。たとえ完全な録音再生能力を持つ録音機を用いても、結果は同じである。録音した自分の声を聴く場合は、聴いているとき自分の声帯や喉頭は振動していないから骨伝導は無く、専ら空気伝導で声が内耳に伝わることになるから、自分で発した声を自分で聴く場合と、聞こえ方が異なるのである。

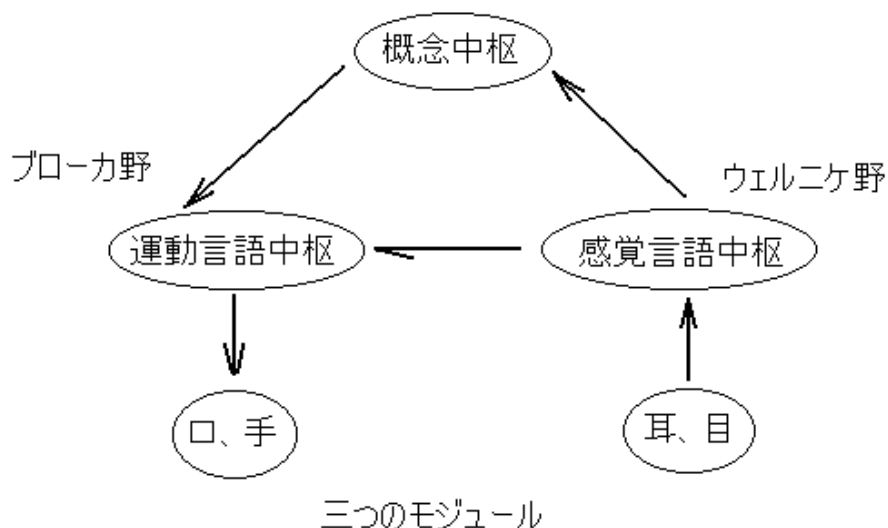
他人が聞いているあなたの声は、録音したあなたの声をあなたが聞いたときの声に似ていないはずだ。なぜなら他人が聞いているあなたの声は空気中を伝ってその人の耳に到達するので、録音した自分の声を聞く場合と同様に、空気伝導しか音の伝達の経路が無いからである。録音して聞いた自分の声は、ずいぶんつまらなく聞こえるだろう。骨伝導と空気伝導の二経路の振動が同時に内耳に伝わることで声に厚みが増し、自分の声は自分には魅力的に聞こえる。しかし他人には、空気を伝ってきた薄っぺらな声しか聞こえないのだ。録音した自分の声を聞いてそのことにはじめて気付かされると、何とも恥ずかしくなってくる。

人が言葉をどのように受け取るかということに関しても、これと同型の議論が成り立つと思う。私達は言葉を話し、言葉を聞く。あるいは私達は言葉を書き、言葉を読む。話す／聞く、書く／読むという関係は、関数／逆関数、あるいはコーディング／デコーディング、モジュレーション／デモジュレーションの関係のように見えるかもしれないが、それは正しくない。**私達が聞くときにたどる経路は、私達が話すときにたどる経路の逆ではないし、私達を読むときにたどる経路は、私達を書くときにたどる経路の逆ではない**からである。一つの経路を行き来するのではなく、行くときと来るときで別の二つの経路があるのだ。

脳には、話したり書いたりする能力を担う部分と、聞いたり読んだりする能力を担う部分が別々にあると考えられている。前頭葉下前頭回に位置しているブローカ野という名前の領域がダメージを受けると、話すスピードが遅くなり、切れ切れの言葉しか話せず、声の高低強弱抑揚が不自然になるというように流暢な発語ができなくなり、また複雑な構文を理解することが難しくなる。話す能力と同様に、書く能力も損なわれるという。一方、側頭葉上側頭回の上方に位置しているウェルニケ野という名前の領域とその周囲がダメージを受けると、言語理解能力が著しく損なわれるという。発語の流暢さは失われないが、接続詞や代名詞が頻出し、意思を伝えるのに必要な単語が欠落するなど空疎な内容しか話

せなかったり、錯語や造語が目立ったりするようになる。黙読音読は不可能になり、書くことは一応可能であるが、錯書が目立つようになる。

アメリカのボストン学派によれば、私達の脳には運動言語中枢と感覚言語中枢と概念中枢というものがある、それら三つが別々の機能を果たすことで、私達は話したり聞いたり、書いたり読んだりできるのだという。運動言語中枢は言葉を話したり書いたりする機能、感覚言語中枢は言葉を聞いたり読んだりする機能、概念中枢は運動言語中枢と感覚言語中枢を結ぶより高次の機能を持っているとされる。運動言語中枢はブローカ野のことであり、感覚言語中枢はウェルニケ野のことであり、概念中枢はどこかに局在しているわけではないが、前頭葉などがそれに相当する。私達が話したり書いたりする場合は、概念中枢→運動言語中枢→口や手の筋、という経路を信号が伝わる。また私達が聞いたり読んだりする場合は、耳や目からの信号受信→感覚言語中枢→概念中枢、という経路を信号が伝わることになる。(図1)



ボストン学派の学説は、複雑に相互作用している脳の活動をごく単純化したものであり、今日ではそれだけでは説明できないような現象も多く発見されている。だが、話したり書いたりする過程と、聞いたり読んだりする過程とが別々の経路を通る信号処理に基づいていることは、確実である。

私達が言葉を話すとき、二つの過程が混ざって意識されるのではないだろうか。すなわち、自分が言葉を選んで話す過程と、その選ばれた言葉を聞く過程の二つである。それに対して、別の聞き手があなたの言葉を聞くときは、あなたが選んだ言葉を聞く過程しか意識しない。聞き手自身は話していないから、これは当然である。これは前述した空気伝導と骨伝導の話と類比的である。話し手が話している自分の声を聞くということは、空気伝導と骨伝導の二つの経路を介して声を聞くことであるが、これは話し手が話すときに、言葉を選んで話す過程と選ばれた言葉を聞く過程の両方を意識していることに対応している。

また聞き手が空気伝導だけを介して声を聞くように、聞き手は話し手によって選ばれた言葉を聞く過程しか意識しない。つまり、話し手と聞き手には二重に意識の差があるわけだ。話し手が名台詞だと思っても、聞き手には凡庸な発言にしか聞こえない可能性は、常にある。

録音した自分の声を聞いたときはどうなるだろうか？録音した自分の声を聞くことに慣れていない人にとって、再生された声はまさに他人の声である。したがって他人が聞く場合と同じように、空気伝導によって伝わってきた音声を、耳→感覚言語中枢→概念中枢、という経路を信号処理が進むことで聞くのみである。そうなれば、自分も他人と同じように自分の声を聞くことができるだろう。ただし、ボイスレコーダーをよく使う人や、自分の会話がテレビやラジオでよく放送されている人が自分の声を聞く場合は、別の可能性がある。彼らは録音した自分の声をそれとして容易に認識できるから、彼らがそれを聞くときには、彼らがそれを話したときのことを想起してしまうのである。つまりこれは、耳→感覚言語中枢→概念中枢という経路と、概念中枢→運動言語中枢という経路が同時に働いてしまうことを意味している。これでは、自分の声を聞く意識と、自分で話す意識が混合してしまう。他人が聞いているような態度で、自分の声を聞くことができなくなってしまうのである。

次に読み書きの場合について検討しよう。基本的には話したり聞いたりする場合と同じである。録音された自分の声を聞くというケースは限られているが、自分の書いたものを読むということは、少なくない。文章を書くとき私達は、読みながら書く、という作業をしている。それまでに書いた自分の文字を目で追いつつ、ペンを動かしたり、キーボードを叩いたりしている。間違いや不適切な表現に気付けば、戻って訂正するであろう。書くという作業は、読むという作業なしには成立しえない。

一方私達は、自分自身の書いた文章を、それが書かれてあるがままに読む、ということが大変苦手である。私達は、自分が書いたものを読んでいるときに、自分が書いているときのことを想起してしまうからである。誤字や脱字、適切ではない文のつながり、読み手を誤解に導いてしまうような意図せざる解釈の存在に、書き手は気付かないことがある。他人に読んでもらって、初めてミスや問題点に気付くということが少なくないのである。どうしてそうなるかと言えば、自分の文章を読むと、自分が書いた時の意識が呼び戻されてしまい、何が書かれているか予めわかってしまうので、初心に戻り、文章をはじめて見た人の気持ちになって、虚心坦懐に字面を追っていくということができないからである。

自分の書いた文章を読み直すとき私達は、文章を読み返すつもりでいながら、実は同じ文章を再び書いていることが多い。これでは、書き表したかったことを、書いた文章が適切に表現できているかどうかを、確認し損ねてしまう。文章の書き手には、別の人が読んだ場合よりうまい文章に見えてしまうこともあるだろう。それはちょうど、自分の声が別の人にとってより自分にとっての方が魅力的に聞こえることと対応している。文章を書く過程が想起されるために、他人が読んで読み取れる以上のものを、書かれた文章に見出し

てしまうのである。このようなケースはよく見かける。書き手（だけ）が上手だと思った文章は、たくさん世にでてくるからである。インターネットにはそのような文書がごろごろしていることを皆さんもご存知であろう。

逆に文章の書き手には、別の人を読んだ場合よりひどい文章に見えてしまうこともあると思う。引っ込み思案で、文章を書くのは嫌いだ、という人の中には実はそのような理由で書くことに苦手意識をもっている人がいるかもしれない。文章を書く過程がつらく恥ずかしいものであったなら、それを再び書くようにして読むことは、往時のつらさと恥ずかしさをもう一度想起させてしまうだけであろう。そのような人が書いた文章が、他人にとって実は名文であるというケースは、よくあるはずだ。書き手が下手だと思った文章は世にでてくるのが少ないので、このような事態にはあまりお目にかからないというだけの話である。

文章を書いて人に読ませたいと思っている人は、書き手と読み手の意識の違いに十分注意する必要がある。同じ文章を再び書く意識をなるべく抑え、初めてその文章に遭遇した読者のような気持ちで、自分の文章に取り組まなければならない。これは、読み手のことを考えた推敲の必要条件の一つである。されど、文章を書いた時のことを想起してしまう傾向は、どうしても抑えがたいところがある。その場合は、書いた文章を一旦どこか目のつかないところに隠し、時間がたってから読み返すというのも一考である。書いてから時間がたてばたつほど、書いた時のことは忘れてしまう。記憶が薄れてしまえば、書いた時のことを想起できなくなるわけだから、文章に初めて接する読み手の気持ちになって、読み込んでいくことができるというものである。昔書いた自分の文章を読むと、その下手さで見ると耐えない気持ちになることがある。これは自分がその間に成長したからという理由で説明できる部分もあるが、自分がその文章を書いた時のことを想起できなくなったため、字面から読み取れる以上のものを感じ取ることができなくなったということにも原因を求められることができると思う。

文章は、言葉を選んで並べていくことで書かれる。読み手は、選ばれて並んでいる言葉の意味を読み取る。言葉を選ぶという過程は、翻訳の過程とは全く異なる。日本人の私達が日本語の言葉を発する時、その言葉の素が英語やらフランス語やら中国語の言葉として既に存在していて、私達はそれを翻訳しているだけなのだという意見は論外である。だが、言葉を選ぶ前に、たとえば意味や意図のような統一的な何かがあって、それが日本語に変換されるだという考え方は、簡単に排除できないだけの魅力があるのは確かである。

だが、脳における情報処理の過程が、意識の過程と同型であるという考え方を受け入れるなら、統一的な何かは既に存在して、それが翻訳されて言葉になるという見方は不適切だと分かる。脳の情報処理は、超並列的な処理だと言われている。脳では、ニューロンがシナプスを介して他のニューロンに信号を送りあっている。それぞれのニューロンは他のニューロンからシナプスを介して受けた信号を時空間積分し、その値がある閾値を超えた

場合にのみ「発火」して、他のニューロンに信号を送る。

これを人間でたとえるならば、人々が投票権の獲得を目指してお互いに繰り返し投票しあっているようなものである。各人は当選すると、周囲にいる特定の複数の他者に投票する権利を得る。票にはそれぞれ重みが定められていて、マイナスの重みの票も存在する。また投票が締め切られることはなく、一時期に集中して投票を得た人が当選し、当選した人はすかさず別のの人に投票するということが、延々と、いたるところで、同時進行しているのである。このような投票合戦が私達の意識活動に対応する脳での活動であるなら、一つの言葉が選び出される過程は、既に統一されたものの翻訳過程ではなく、**不統一で多様なものの統一化の過程**なのだ。「物語を織りなす」とか、「言葉を紡ぎだす」といった表現が用いられるのは、言語化が多を一にする過程であるという事実を裏付けている。逆に、選ばれた言葉を聞いたり読んだりする過程は、**言葉の統一が多様なものへと発散していく過程**だと言えるかもしれない。

したがって言葉選びのプロセスは、民衆を統一化する政治のプロセスになぞらえた方が適切だと思われる。この比喻も単純化にすぎて実情からかけ離れているには違いないのだが、翻訳の比喻よりは、ましである。すると言葉を選ぶ過程は、民衆の代表者を選ぶ過程に対応することになるし、選ばれた言葉を聞いたり読んだりする過程は、代表者が民衆を統治する過程に対応することになる。ここで重要なことは、**適切なプロセスによって代表者を選ぶことが、選ばれた代表者の適切さを保証するわけではない**、ということである。現実の政治でも、選挙法に準じて当選した代議士が、民衆にもっとも利益をもたらしてくれる代表者になるとは限らないことは、周知の事実である。言葉でも同じことが言えると思う。多様を統一化する過程が適切であったとしても、それによって選ばれた言葉が多様性をあらわすのに適切だという保証は、ないのである。

したがって、自分で書いた文章を再確認するために、文章を読み返すといいつつ、自分がその文章を書いているときのことを想起してしまうというのは、ちょうど政治家が、自分の当選した選挙の過程の適切性を再確認することで、自分の政治活動の適切性を再確認しようとしているようなものである。当然こんな再確認はインチキだ。合法的に選挙に当選した政治家の中にも、政治家として失格な者が存在するからである。

また、**適切な代表者が、適切なプロセスによって選ばれた代表者である必要も無い**。ことばの世界でも、アレキサンダー大王のように、外来の征服者がよりよく民心を掴むということがありうるのだ。他者が書いた文章が、自分の書いた文章よりも、より適切に自分の中の多様なものを統一化してくれる、ということはしばしば起こる。また、詩という、言葉の能力の限界に挑戦する営みにおいて、既製の言葉のルールに違反する表現が多用されるのは示唆的である。詩作においては、選ばれた言葉の適切性を追求するために、言葉を選ぶ過程の適切性を犠牲にしていると言えるのかもしれない。言葉を選ぶことの意味と、言葉が選ばれてあることの意味は別物であり、前者の適切性と後者の適切性は、論理的に独立なのである。

